

50 イェスペルセンのThree Ranks説と付加詞

伝統文法の大家であるイェスペルセン (Otto Jespersen, 1860-1943) は数多くの理論を提案したが、本稿ではその中でも特に重要なJespersen (1924, 1933) の**三位階 (Three Ranks) 説と付加詞 (adjunct)** の考え方を紹介したい。

まず、Three Ranks説は単語間の従属関係に注目し、品詞と機能は別問題であることを表したものである。例えば、*extremely hot weather* という表現において、実詞 (substantive) の *weather* を **1次語 (I) (primary)**、形容詞の *hot* を **2次語 (II) (secondary)**、副詞の *extremely* を **3次語 (III) (tertiary)** と呼んだ。つまり、学校文法の用語を用いれば、1次語は名詞相当語句、2次語は形容詞相当語句、3次語は副詞相当語句にほぼ相当する。しかし、品詞と機能がずれている例を概観することがこの理論の理解に際してはより重要で、例えば、普通は実詞が1次語であるが、*the Almighty, the rich (=rich people)* などは形容詞であるが1次語に、*leave here* や *from here* の *here* は副詞であるが1次語だと分類されるということである。

次に、Three Ranks説に関連した重要な用語として、**連結 (junction)** と**対結 (nexus)** がある。例えば、

(1) a. *this (II) furiously (III) barking (II) dog (I)*

b. *This (II) dog (I) barks (II) furiously (III).*

において、(1a) と (1b) はある種の共通関係があり、前者を連結、後者を対結と呼んだ。しかし、連結は内心構造 (endocentric construction)、対結は外心構造 (exocentric construction) あるいは相互依存関係であるという本質的な違いがあり、この点については大きな批判がある。しかし、対結という概念はその後の英語学、言語学にも大きな影響を与え、例えば、*the doctor's arrival* のような表現をイェスペルセンは対結実詞と呼んだ訳だが (cf. *the doctor's house*)、現代の理論言語学の「叙述、主語・述語関係」(predication) に相当する (ネクサスの簡にして要を得た解説については秋元 (2002) を参照)。

次に、Three Ranks説における1次語 (I)、2次語 (II)、3次語 (III) にあたる、従属関係を示す用語のことをそれぞれ主要語 (principal)、付加詞 (adjunct)、従接詞 (subjunct) と呼ぶ。その中でも付加詞 (付加部) は現代英語学でも使われる重要な概念であるが (現代では多くの場合、義務的ではない修飾語句のことを付加部と呼び、補部と対比される)、イェスペルセンの理論では付加詞は**直接的付加詞 (direct adjunct)** と**間接的付加詞 (indirect adjunct)** の2つに大別される。直接的付加詞とは例えば、*a red rose* の *red* のような例で、*a rose which is red* のように

関係節で書き換え可能なものである。この用法は、あるバラを数あるバラの中でも赤いバラに限定するような、制限的で知的な用法である。それに対し、間接的付加詞とは単純に関係節には書き換えられないもので、イェスペルセンの理論では4つの下位分類がある。すなわち、(i) **複合的付加詞 (compositional adjunct)**, (ii) **転移従接詞的付加詞 (shifted subjunct adjunct)**, (iii) **部分的付加詞 (partial adjunct)**, (iv) **熟語的付加詞 (idiomatic adjunct)** の4種類である。(言い換えると、イェスペルセンの理論では、付加詞は直接的付加詞と間接的付加詞が4種類で、計5種類に区分されることとなる。)

まず、(i) 複合的付加詞の例である a sick room (=a room for the sick) については、上記の説明の通り、*a room which is sick とは書き換え不可能で、複合的な (= 合成的ではない) 意味を有する付加詞だと言える。次に、(ii) 転移従接詞的付加詞とは an early (II) riser (I), a heavy (II) smoker (I) のような例であり、その場合、early や heavy は riser や smoker 全体に掛かっているのではなく (*早い起き手, *体重の重い喫煙者)、派生名詞の動詞部分のみを修飾している ([早く起きる] 人, [たくさん煙草を吸う] 人)。つまり、基底には rise (II) early (III), smoke (II) heavily (III) が隠れているということである。そして、用語としては、heavily (III) = 従接詞 (subjunct) から heavy (II) = 付加詞 (adjunct) に変化 (shift) しているので、転移従接詞的付加詞と呼ばれるということである。

(iii) 部分的付加詞は (転移従接詞的付加詞と概念的な類似性があると思われるが) 主要部の意味の一部分のみを修飾する付加詞で、a New Englander, a public schoolboy などが例である。つまり、New や public は Englander, schoolboy 全体に掛かるのではなく、a [New England]er, a [public school]boy のように England, school のみを修飾しているということである。

(iv) 熟語的付加詞は以上のどれにもあてはまらないもので、例えば、a born orator (生まれながらの雄弁家), in all their born days (彼らが生まれてこのかた) などの例がそうである。

イェスペルセンは統語論や英語史に大きな影響を与えた人というイメージが強いと思われるが、以上の付加詞の分類は形態論研究者にも大きな示唆を与えているものと思われる。

(野村 忠央)